

GAKKAN

Interfaculty Initiative in Information Studies and Graduate School of Interdisciplinary Information Studies, The University of Tokyo



No. 53
2019 AUTUMN

INDEX

	INTERVIEW _____	02
	教員インタビュー 菅豊教授—フィールドに参加する民俗学、文化の担い手として文化を記述する—	
	TOPICS 1 _____	04
	ヒューマンオーグメンテーション学(ソニー寄付講座)	
	TOPICS 2 _____	06
	東京大学情報学環オープンスタジオ 中山未来ファクトリー	
	NEWS _____	08
	インフラリテラシー・プロジェクト研究会／稲見・檜山研究室オープンハウス・レポート／ ナスの収量予測 高知県農業技術センター研究員 vs 情報学環越塚研AI エンジン／ 東京大学制作展Extra2019 “enact one’s self”／ 「Shinobazu Wonder 12—明治アーティストの離合聚散」企画展を開催／ 山江村情報化推進員の取組みが「平成30年版 情報通信白書」に掲載／ 授業紹介「生物統計情報学基礎 II(臨床試験方法論I)」／ひろがり・つづける「記憶の解凍」	
	PEOPLE _____	10
	人事異動／着任教員自己紹介	
	CONGRATULATIONS _____	11
	学際情報学府学位記授与式／教育部修了証書授与式／学際情報学府入学式・ガイダンス／入試説明会／合格発表	
	BOOKS _____	11
	新刊情報	
	TIE-UPS _____	12
	国際連携／社会連携	
	ADMISSIONS _____	13
	在学者数／入試情報／修了者就職情報／特別奨学金プログラム	
	THESES _____	14
	2018年度修士論文・博士論文題目一覧	
	FACULTIES _____	16
	教員一覧	

フィールドに参加する民俗学、文化の担い手として文化を記述する — 菅豊 教授

東洋文化研究所から流動教員として来られた菅先生に、闘牛(牛の角突き)と錦鯉をめぐる現在の研究とその手法について伺いました。

— 現在のご研究について教えてください。

日本と中国をフィールドに、動物と人間の関係をめぐる民俗学に取り組んでいます。動物と人間との関係性を通して、自然資源や文化資源の管理の問題や、儀礼や信仰、神話について考えてきました。いま対象としている動物は、ひとつが牛、もうひとつは錦鯉です。

牛は、新潟県小千谷(おぢや)市というところの闘牛を対象としています。現地では「牛の角突き」と言います。そこで天神という名前の非常に強い牛を持っている、私自身も「牛持ち」として闘牛をやっています。「牛の角突き」は、国指定の重要無形民俗文化財。この文化資源の管理や維持に興味があります。維持されるにあたって、自分自身も参加しながら研究を進めています。



攻め込む天神

錦鯉の方も、同じ小千谷市。錦鯉は、もともと小千谷と隣の山古志という地域にまたがる二十村郷という場所で100年以上前にできたものです。変わった鯉が出てきてそれを残した地方の物好きから始まり、それがあつた時から流通し始め、大正時代の東京大正博覧会で知られるようになった。その後、高度成長期に爆発的に全国に広まって、さらにグローバル化の浸透とともに、いまや生産量の80%以上は海外輸出です。上海の玉仏寺にも錦鯉がいて、餌をやると功德が叶うと言われています。日本人は、錦鯉は知っているけど、今はよほどの愛好家しか手は出さない。現在は中国系の人が多いですが、シンガポール、タイ、ベトナム、ラオスにも広がっています。去年、錦鯉の有力な業者のオークションが広島でありました。最高額はいくらだと思いますか?なんと2億300万円です!1匹に対してですよ。

— いつかは死んでしまうのに…!

消える芸術なんですね。絵画だったら一生残る。ところが、錦鯉が本当に美しくなるのは一瞬です。長ければ何10年も生きますが、当然、容姿というはだんだん変化してきて、色も褪せてくる。そこで一番のピーク時を競うわけです。錦鯉の

世界には、「ZNA」という数10ヶ国にまたがる全世界組織があります。ZNAというのは、全日本愛鱗会(Zen Nippon Airinkai)という、日本語そのままの略。これが世界最大の愛好家団体で、いわゆる品評会をやります。中国では地方、市、国家レベルの後に中国大会を実施しています。さらにアジア大会も。日本では、毎年2月に全日本総合錦鯉品評会というのがあります。これが英語ではWorld Championshipとあって、つまり、ここでの優勝者が世界チャンピオンということになる。こうした色々な楽しみ方があって、愛好家グループから地方、市、国、世界レベルまで重層的な広がりがります。

— 錦鯉の文化について、研究としてどのように見られているのでしょうか?

ひとつは、「美」の問題です。錦鯉の美というのは、なかなか難しい。ふつうのアートもそうですが、素人が見てもきれいだと思うものがあるけれど、どうきれいかを説明するのはとても難しく。アートの世界には「アート・ワールド」があるでしょ。作者や作家と、それを評価する人たち、審査員、美術評論家、学者、画商とか。それから、オーディエンスや消費者。絵画や彫刻の世界では、そういう人たちが総合的に評価の基準や体系みたいなものを持っている。そうしたアート・ワールドが錦鯉にもあって、その枠組みから錦鯉を通して「美」の問題を考えています。もうひとつは、トランスナショナリズムの問題。日本発の文化が、それぞれの国のなかで脱文脈化し、ローカライゼーションしていく。中国では、さっき言ったように玉仏寺で日本にはないような信仰の対象になっていたり。そこには、中国ではもともと魚が富の象徴だったという歴史もあるんですけどね。



功德のための錦鯉への餌やり(上海・玉仏寺)

— 研究対象に「参加する」ということをされています。

そうですね、私自身も文化の担い手になっていくというのがひとつの手法です。錦鯉についても全日本錦鯉振興会というところの名誉顧問をしていて、実は錦鯉の審査もやっています。先ほど「美とは何か」って語りましたが…、いまだに分からなくて難しい(笑)ただ研究手法ということという、私はもともとコミットメントとか、エンゲージメントを積極的にやろうと思うような、実践的な人間ではないんです。非常にベーシックに、文化とは何か、それが面白いから調べるとい、知的好奇心だけで研究をしていました。



錦鯉品評会での審査風景

ただ、闘牛をやりに始めて2004年に新潟県中越地震があって、フィールドが被災地になりました。多くの仲間たちの牛が死ぬだけでなく、家財も全部破壊されて、友人の息子さんたちも亡くなりました。そういうものを目の当たりにした時に、見るだけではいられなくなったのがこのフィールドだったんです。見るだけ聞いただけだと、なんだか場違いのような…私は何をしているんだろうっていう。そこで何かの役に立とうと思ったわけではないんだけど、手伝いなどをやり始めていくなかで、この文化というものの担い手に自然となってしまった。それが本当のところですよ。

ただ、こうした関わりを持つなかでアメリカに行っていた時期があって、そこで「Public」が頭についた研究分野に興味を持ちました。私の場合には、Public FolkloreとPublic Historyに特に興味を持って調べました。これらは、Public Anthropologyも含めて全てエンゲージメントをベースに、かつては「Applied(応用)」と呼ばれていた研究分野を「Public」に置き換えるかたちでもう一回とらえ直そう、という動きです。それが私なりのやり方で、2004年以降に始まりました。

— 「エンゲージメント」にも、さまざまなものがあると思います。

一番スタティックなのが、フィールドワークで単に調べようっていう私の最初の姿勢ですよ。それは別にその地域に関与しようなんて意思はない。もう一端にあるのは、最初からその地域を変えよう、助けようなんて思っているあり方ですよ。極端な話、何の問題もないところに専門家としてやってきて「何か問題はありませんか?」みたいな、問題の掘り起こしをするような世界というのはある。自分たちで問題を起こしてしまうような。ふつうは、その中間形態でさまざまなことが起こるわけですが。

私も現地のさまざまなことにコミットはしていきますが、ただそこで自分から何かを売り込んでいくことはしません。これをやってみませんか?とか、こうすれば村が豊かになりますよ、といったような。一度だけあったのは、動物愛護法の改正のときに「これはまずいよ」とは言いました。環境省での議論に闘牛が取り上げられていて、そういうことは地元の人には知らないから。そうしたら、「なんで

だ?おい、どうすんだ?!」って私に怒り出すので「いや、違う、俺が言ってるんじゃない!」って言い返しましたが(笑)大きな問題が起こったときにそうした情報を伝えるとか、日頃のことで聞かればアドバイスをするとか、地域の人たちの知恵と能力が高まるなら、その媒介者にはなろうと思っています。フィールドワークをしていると、オンとオフがある。フィールドにいくとオン、帰ってくるとオフ。でも、オンとオフの区別がなくなってくる研究の場っていうのも、ひとつくらいはあってもいいと思っています。

— 学際的に考える姿勢について、ご意見を聞かせてください。

多分、民俗学というのはディシプリンのなかで一番弱くて、数10年後には消える運命にある。ある時代の産物なんです。近代に起こって、その時代が変わると必要性を失って消えていく。そのベースには、「野の学問」という思想が埋め込まれています。要するに、この学問は野から起こったんです。一般の人がやり始めて、それをなぜか誰かがアカデミズムに取り込もうとして、ちょっと失敗しているというのが現状です。

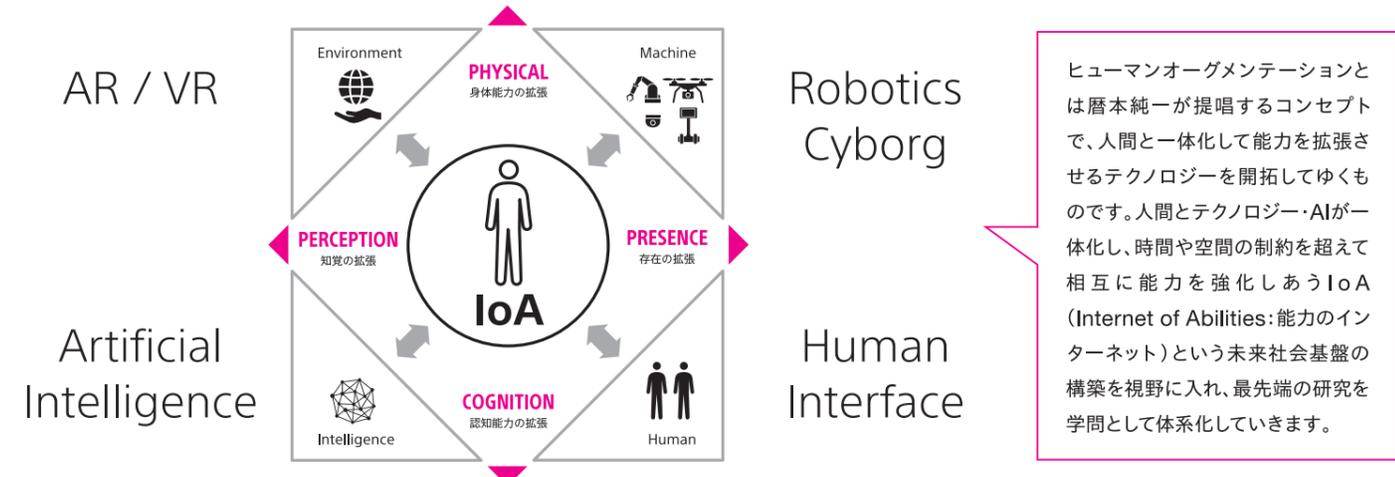
私はその思想としての「野の学問」に魅力を見出していますが、実際に研究をする際には、社会学、歴史学、文化人類学のなかで、同じようなことをやっている人たちがいるわけなので、その人たちの研究を受け入れ、さらにそういう人たちに対して発信していくのは当たり前なことなんです。色んな背景をもつ研究者と交わるのは、大事という以上にあたりまえなんです。私が昨日でた研究会はPublic Historyに関する研究会で、民俗学者は私1人でした。とてもアウェイ感がありましたけど、そうした場で発言できることは重要だし、また学べることもたくさんあると思っています。



聞き手: 島海希世子(特任助教)
文章構成: 潘 夢斐(博士課程)

ヒューマン オーグメンテーション学 (ソニー寄付講座)

2017年度より、情報学環に「ヒューマンオーグメンテーション学(ソニー寄付講座)」を開設しました。ヒューマンオーグメンテーション(人間拡張)学というあらたな学問領域を開拓することを通じて、産業界と教育界を活性化させ、未来を創る人材の育成と強化へとつなげていくことを狙いとしています。講座では定期開催の学生向けセミナーやサマースクールに加えて、年度末には広く一般の来場者を対象としたシンポジウムを開催しています。また不定期ながら特定のテーマを掘り下げる実験的なワークショップも企画しています。この記事では、サマースクールとシンポジウムの様子をご紹介します。



シンポジウム2018 The future is already here: SFと人間拡張の未来



もともと人間の能力をテクノロジーで増強するというアイデアは、コンピュータサイエンスの研究者が興味を持ち始めるよりもはるか前に、サイバーパンクSFの世界で魅力的に描写されてきたものです。2018年3月に東京大学伊藤国際学術研究センターで開催されたシンポジウムは、SFから人間拡張学の未来を考える会になりました。

冒頭ではSF作家のウィリアム・ギブスン氏と暦本純一教授の対談映像が上映され、1984年に発表された「ニューロマンサー」執筆当時の状況から将来の技術に対する展望まで意見が交わされました。印象的だったのは、ウォークマンをつけて街を歩いたり、ゲームコンソールに熱中する少年をみて「電脳世界に接続する」という小説のアイデアを思いついた、というギブスン氏の言葉でした。

これを受けてパネルセッションでは、講座の教員2名に加えて学際情報学出身で早稲田大学のドミニク・チェン准教授と小説家の上田岳弘さんをゲストにお招きして、文学をはじめとする創作物がのちの科学技術に与える影響と、その逆にテクノロジーの発展によって生まれるあらたなアイデアや表現メディアの両面から、幅広い議論が行われました。会場からの質疑も盛り上がり、シンポジウム終了後のポスターセッションでは、ヒューマンオーグメンテーション学の社会展開についても活発な意見交換がおこなわれました。

サマースクール ヒューマンオーグメンテーション 学特論(総合分析情報学特論XII)



2018年9月25日から10月30日にかけて、学際情報学府の授業「ヒューマンオーグメンテーション学特論(総合分析情報学特論XII)」との共催でサマースクールが開催されました。全体は講義パートと実践形式のグループワークパートから構成され、受講者は6週間を通して「人間の能力を拡張する体験」を実現するプロトタイプ制作にとりくみました。

講義は人間拡張技術の概要とインタラクティブシステム設計の基盤となる知覚と運動のメカニズムに関するゲストレクチャーがあり、基礎から応用までを視野に入れたスタイルで実施されました。グループワークでは、アイデア出しからセンサやアクチュエータをつかったハードウェア実装またVR/AR技術などの情報提示手法を駆使して、ときにはTAから助言を受けながら試行錯誤している様子が伺えました。

最終日には、各チームが提案するプロトタイプの発表・体験会が開催されました。各グループからユニークなアイデアをもとにしたアイデアが披露され、なかでもモーションキャプチャを用いたダーツ上達支援システムは好評でした。その後の体験会とあわせて非常に活発な議論が交わされ、その後の研究のヒントになるようなフィードバックが多数得られました。

記事: 味八木 崇(特任准教授)

東京大学情報学環 オープンスタジオ 中山未来ファクトリー

東京大学情報学環オープンスタジオは、中山隼雄氏のご寄附によって2017年4月に竣工いたしました。東京大学における「工房・広場」をイメージした拠点として、ワークショップや展覧会など、社会に開かれた創発的な研究教育活動に資する場を提供しています。当スタジオでは、中山隼雄氏および中山隼雄科学技術文化財団からご寄附をいただき、「人間と遊び」をキーワードにした「中山未来ファクトリー」プロジェクトに取り組んでいます。詳しくは、活動のアーカイブをご覧ください。 <https://openstudio-utokyo.com/>

挑戦！ロボットプログラミング！

小学生を対象としたロボットプログラミングワークショップを開催しています。これまでに、2018年3月、8月、2019年8月の計3回開催しました。このワークショップは、公益財団法人文京アカデミーが実施する講座「夏休み子どもアカデミア」の1イベントとして実施され、文京区内の小学校に通う小学4年生から6年生の子どもたちが参加しました。このワークショップでは、ボールが転がるスロープにロボットを組み合わせてさらに面白くする装置を制作してもらいました。小学生たちは楽しそうにスロープを組み立てたり、ロボットを作るためのセンサーやモーターの使い方やプログラミングについて調べたりと、熱心に作品

作りに取り組んでいました。ワークショップの最後には、小学生たちに作品発表とデモンストレーションを行っていただきました。大きく複雑なスロープや、面白い動きをするロボットなど、小学生たちの自由な発想が作品に込められていました。夏休み子どもアカデミアが実施したアンケートの「この講座に点数をつけるとしたら何点？」という質問には、参加した小学生全員が100点をつける回があったほど、満足してもらえたようです。

作品の動画は中山未来ファクトリー
YouTubeチャンネルからご覧いただけます。



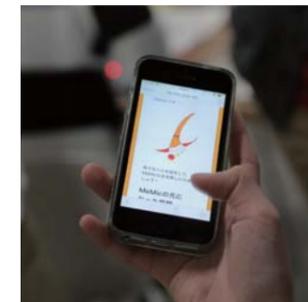
あそびの未来ファクトリー

2019年2月27日から3月13日にかけての2週間、主に大学1・2年生を対象にしたハッカソン「あそびの未来ファクトリー」を開催しました。このハッカソンでは、参加者はチームを組み「あそび」とはそもそも何なのかについて考えを深めること、「未来のあそび」を考えプロトタイプを作ることに取り組みました。

参加者は、あそびに関する学術的な考察と、あそびを作る際の考え方のレクチャーを受けた後、約10日間の自由制作期間を経て、最終成果発表会に臨みました。最終成果発表会では、各チームからあそびのプロトタイプと、それを紹介するビデオが発表されました。「追いかける」「体を動かす」「真似をする」など、楽しさの要素がうまく組み合わせられ、新しいあそびが生まれていました。発表会後は互いに作ったあそびを体験し合い、参加者同士で盛り上がりました。

今回は、マーベラス、博報堂、ソニーの社員の方々に審査員としてお招きし、成果物に対する講評や学生へのアドバイスをいただきました。懇親会は審査員も交えて盛り上がり、ハッカソンとは別に企業見学会の企画も立ち上がったりと、学生と企業との繋がりも生まれていました。あそびの未来ファクトリーは2020年の春にも実施予定です。

ハッカソン開催中の様子や成果物の一部は
あそびの未来ファクトリー公式サイトでご覧いただけます。
<https://sites.google.com/view/asobi2019/>



Workshoppers 2018 / 2019

博士課程教育リーディングプログラムである東京大学GCL GDWS機構によるワークショップの実践報告会を開催しました。専門家による講義やGCL学生によるワークショップ実践報告が行われ、ワークショップに関心を持つ人たちの交流の場となりました。



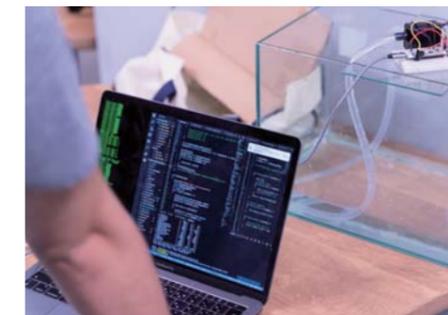
三浦半島の魅力を 再定義するワークショップ

京急電鉄と東京大学の共同研究として、三浦半島の観光コンセプトを再定義するワークショップ(計5回)を開催しました。ワークショップの様子は、テレビ東京『ガイアの夜明け』で紹介されました。



東京大学 Spring/Summer Founders Program 発表会

東京大学本郷テックガレージが主催する、技術プロジェクトや製品開発への支援を行う発表会を夏と春に開催しました。学生たちによって作られた、顧客の課題を解決するアイデアのプロトタイプが発表されました。



インフラリテラシー・プロジェクト研究会

2019年3月16日、水越研究室による共同研究プロジェクト「メディア・インフラに対する批判的理解の育成を促すリテラシー研究の体系的構築」の第6回研究会が開催されました。本プロジェクトはメディア・インフラの構造や機能、デザインを技術的観点からだけでなく、政治経済的、文化的な観点から批判的に理解していくメディア・リテラシーを育成するための、新たな理論構築と学習プログラム開発を目的としています。当研究会では、2018年度の取り組みの報告と、ワークショップ型の学習プログラムのパイロット実践の成果が紹介されました。また、登壇者に社会思想史、教育学、そしてプラットフォーム企業の方々を迎え、それぞれの観点からメディア・インフラストラクチャーの現状認識や、メディア・リテラシーの課題について活発な議論が行われました。

記事：神谷説子(博士課程)



稲見・檜山研究室 オープンハウス・レポート

2019年5月31日・6月1日の2日間、東大駒場リサーチキャンパス公開2019の一環として稲見・檜山研究室の研究成果のデモ展示が行われました。当研究室では「自在化身体」をメインテーマに、身体の拡張やその認知プロセスに至るまで、人間の身体を理解するための幅広い研究テーマに取り組んでいます。人間に腕型のロボットアームを追加し足による自在な操作を可能にする「MetaLimbs」、指先が顕微鏡になり微細な構造を視覚と触覚の両方で知覚することができる「MagniFinger」、生身の身体を離れて瞬間移動する感覚を体験できる「ExLeap」、覆ったものが透明マントのように透けて見える「光学迷彩」など。身体を軸とした多様な研究成果に、このような未知体験を通じ大人から子どもまで楽しみながら触れて頂くことができました。

記事：船津武志(修士課程)



「Shinobazu Wonder 12 —明治アーティストの離合聚散」企画展を開催

2019年7月13日～15日、吉見研究室・渡邊研究室・凸版印刷株式会社による「しのばず文化情報活用プロジェクト」の企画展「Shinobazu Wonder 12 —明治アーティストの離合聚散」が、旧平櫛田中邸・アトリエ（東京谷中）で開催されました。本展は、明治時代のしのばずエリア（上野と本郷を中心とする地域）に居を構え、芸術活動に身を投じたアーティスト12名に焦点を当て、アートと地域の関連性を提示する試みです。デジタル技術とパネル展示を用いて、各人物の人生の軌跡と周辺地域の歴史の変遷を紹介し、ARまち歩きなどのイベントを交え、しのばずエリアでの彼らの離合聚散と交流活動を描き出しました。来場者アンケートでは「歴史や地域について学ぶことができた」「デジタル技術の可能性を体感できた」などの感想が寄せられました。

記事：潘 夢斐(博士課程)



©KANKO LLP

山江村情報化推進員の取組みが「平成30年版 情報通信白書」に掲載

熊本県山江村と須藤研究室による共同研究のなかで、地域と役場をつなぐ新たな役割として注目を浴びているのが2017年からスタートした山江村情報化推進員の取組みです。この活動ではタブレット端末を活用し、村内16地区に1名ずついる推進員が、各地区の出来事や地域課題を画像や動画で撮影、コメントや住民への周知方法、改善に向けたアイデアなどを添えて専用画面に入力します。例えば鳥獣被害では、これまでの電話によるやりとりと比べ、写真や位置情報の共有によって状況の把握がしやすくなりました。推進員からの情報は、山江村地域づくり研究所が整理し、企画調整課を通じて他課や外部機関へ連絡、その回答を推進員にフィードバックします。必要に応じて、課題に対して議会で補正予算が組まれたり、各区の住民による話し合いの場が設けられることもあります。

記事：並木志乃(特任講師)



ナスの収量予測

高知県農業技術センター研究員 vs 情報学環越塚研 AI エンジン

情報学環と高知県は2018年5月に協定を締結し、IoTなどの先端情報通信技術を用いた、地域課題の解決や地方産業創造などの研究に共同で取り組んでいます。その一環として、高知県農業技術センターと越塚研究室の共同で、ナスの栽培における生育・環境データなどを学習させたAIエンジンを開発し、出荷数の予測精度を向上させるプロジェクトが生まれました。2019年、そのAIエンジンと農業技術センター研究員の収穫果数の予測会を2回実施、予測精度の向上を図ってきました。こうしたプロジェクトの集大成として2019年6月27日、高知県農業技術センターで、AIエンジンをを用いた「ナスの収量予測対決」が行われました。結果は実際の収穫量21個、AIが20個、研究員が18個で、AIの勝ち。注目に値する結果で、今後他の作物への適用も期待されます。

記事：越塚 登(教授)



東京大学制作展Extra2019

“enact one’s self”

2019年7月5日～8日、情報学環オープンスタジオにて「東京大学制作展Extra2019 “enact one’s self”」を開催しました。“enact one’s self”というコンセプトのもと、VRを用いた体験型作品や映像作品など12作品が展示されました。自ら手を動かしたり、触ったり、観察したりすることを通して、自己(one’s self)が受動的・反射的になる(react)のではなく、能動的に行動(enact)するという点について問いかけました。学内のみならず、企業の方や小さいお子様、観光客の方まで、609名の方にご来場頂きました。能動的に行動する体験を楽しんで頂いたようです。また、制作者自身も自分では思いつきもしなかった意見を頂き、「展示する」ことを通じて新たな認知を得られた体験となりました。

記事：宗像佑弥(修士課程)



授業紹介

「生物統計情報学基礎II(臨床試験方法論I)」

生物統計情報学コースの「生物統計情報学基礎 II(臨床試験方法論 I)」は、予備知識があまり無い学生でも臨床試験のデザインと解析に対する基本的考え方を身につけ、プロトコール作成に必要な統計的事項に関する知識を学ぶことを目的としています。学内外から6名の講師陣によるオムニバス形式で進められ、まず臨床試験における生物統計家の役割と業務、主な臨床試験のデザイン、統計解析ソフトSASの利用などから始めます。また、最近の臨床試験で求められるモニタリングと監査、アカデミアの臨床試験とそのなかでの生物統計家に対する期待についてもふれられます。最終的には、学生達が実際の臨床試験の論文について、どのようなデザインでどのような統計解析が用いられているかをプレゼンテーションし、お互いに討議しながら理解を深めます。

記事：小出大介(特任教授)



ひろがり・つづける

「記憶の解凍」

白黒写真の「凍りついた」印象が、戦争と現在の日常との距離を遠ざけ、自分ごととして考えるきっかけを奪っていないだろうか？このような問題意識のもと、私は、広島の高中生・庭田杏珠さんとともに、白黒写真をAI技術でカラー化し対話を重ねて「記憶の色」を蘇らせ、戦争の記憶を継承する「記憶の解凍」プロジェクトに取り組んできました。終戦から74年を迎えた今夏、この取り組みについて日本テレビ「NNNDキュメント」「news zero」、NHKスペシャル「#あちこちのすずさん」などで特集されるとともに、多数の新聞記事が掲載されました。若者の想いから始まった地道な活動により光があたり、多くの人に知られることになったのです。私たちはこの活動を、時代ごとに進化し続ける技術と表現手法を取り入れながら、継続していきます。

記事：渡邊英徳(教授)



着任教員自己紹介



貞広幸雄 教授

空間情報科学研究センターより参りました。空間情報とは、電子地図に代表される、位置に関する情報を含む情報の総称です。空間情報の解析、空間情報を利用した空間的最適化などを専門としており、地図にできるものは何でも地図にしたいという習性があります。地図にしてみたいというものをもちの方は、是非お声がけ下さい。



矢口祐人 教授

総合文化研究科より流動で参りました。US/Pacific Cultural Studies(アメリカ文化・太平洋島嶼文化)を研究しています。本部の国際化教育支援室の責任者も務めており、大学全体の国際化に関わる業務にあたっています。



岡美穂子 准教授

史料編纂所から流動教員として着任しました。大航海時代の日本史とアジア史を研究しています。史料編纂所は前近代日本史の研究所で、ほとんどの研究者は日本の古文書を専門にしていますが、私は南欧の古文書解読が専門です。世界と日本の歴史的な繋がりと、その二つが交わることで生まれた社会や文化の変革に注目しています。



酒井麻千子 准教授

専門は著作権法・情報法です。特に写真の著作権について関心があり、写真の機械的性質が著作権法上の位置づけや解釈にどのように影響を及ぼしてきたのかを検討してきました。情報学環では、より広く、技術と法との関係について、様々な先生方や学生の皆さんと議論を深め、研究を進めていきたいと考えています。



高木聡一郎 准教授

国際大学から移籍して参りました。情報技術が社会に与える影響を、主に経済学の観点から分析しています。近年はブロックチェーン技術やシェアリング・エコノミー等の技術やサービスによって経済の仕組みや産業構造がどのように変わるかに着目しています。学際的な環境の中で、皆様と議論できることを楽しみにしています。



福地真美 准教授

経済産業省から参りました。これまで、海洋プラスチックごみ問題、循環経済促進、エネルギーセキュリティの確保、ダイバーシティ推進、アジアのビジネス環境整備、国際広報といった政策に携わってきました。みなさまと議論しながら、「情報」の力のポテンシャルを最大限に活かしつつ、様々な課題の解決に向けた探求をしていきたいです。



田口純子 助教

産休中の松田英子先生の代員を務めます。専門は建築教育で、現在はネットやゲーム、バーチャルな環境と、リアルなまちづくりを結び、子どもや若者の新しい学びや仕事をつくる実践的研究に取り組んでいます。着任早々、先生方には沢山の研究の視点を頂いています。短い間ですが、ユニークで刺激的な学環を楽しみ尽くしたいと思います。

人事異動

平成31(2019)年4月1日付

- 【教員】**
- 配置換(転入)**
- 貞広幸雄 教授 空間情報科学研究センターより
- 矢口祐人 教授 総合文化研究科より
- 岡美穂子 准教授 史料編纂所より
- 採用**
- 酒井麻千子 准教授
- 高木聡一郎 准教授
- 福島幸宏 特任准教授
- 遊谷遊野 特任助教
- 家坂一行 特任研究員
- 井内秀則 特任研究員
- 井部栄仁 学術支援専門職員

- 【事務職員】**
- 配置換(転入)**
- 篠田正人 専門員 工学系・情報理工学系より
- 東 潤治 上席係長 医学部附属病院より
- 岩田恭味 係長 教養学部等より
- 採用**
- 菊地真由 一般職員
- 幸谷恵美 事務補佐員

平成31年4月15日付

- 【事務職員】**
- 任期満了**
- 植竹絵美 一般職員
- 育児休業復帰**
- 志村絢子 事務補佐員

平成31年4月30日付

- 【事務職員】**
- 配置換(転出)**
- 藤原敦子 事務補佐員 退職

令和元年5月14日付

- 【教員】**
- 採用**
- 田口純子 助教

平成31年4月16日付

- 【教員】**
- 採用**
- 田口純子 特任助教
- 【事務職員】**
- 育児休業復帰**
- 和田那津子 一般職員
- 採用**
- 植竹絵美 事務補佐員

令和元年7月1日付

- 【教員】**
- 採用**
- 福地真美 准教授

平成30年度大学院学際情報学府学位記授与式

3月25日、福武ホールラーニングシアターにて学位記授与式が行われました。田中学府長(当時)より修士課程修了者80名、博士課程修了者5名に学位が授与され、その後、田中学府長と中尾専攻長(当時)から祝辞が贈られました。終了後、優秀修士論文発表会が開かれました。

平成30年度大学院情報学環教育部研究生修了証書授与式

3月14日、福武ホールラーニングシアターにて教育部研究生修了証書授与式が行われました。修了者は16名と例年に比べて多く、列席した13名の修了生に対して、田中学環長(当時)より修了証が授与され、その後、田中学環長と前田教育部委員長(当時)から式辞が贈られました。

平成31(令和元)年度大学院学際情報学府入学式・ガイダンス

4月2日、福武ホールラーニングシアターにて入学式とガイダンスが行われました。ガイダンスは午前と午後の2部構成で実施され、田中学府長(当時)より本学キャッチコピーである「志ある卓越。」の意味を交えながらの祝辞が贈られ、前田専攻長からは学府の紹介がありました。

令和2年度学府入試説明会

6月8日、入試説明会が福武ホールで開催されました。400名を超える参加者が集まり、前半では、田中学府長(当時)と前田専攻長からの挨拶と、各コース長からのコース紹介が、後半では全コースの研究が一堂に会するブース展示が行われ、活気に満ちた説明会となりました。

合格発表

8月30日、令和2年度修士・博士入試(夏季募集・2020年4月および2019年9月入学)の合格発表がありました。出願者数は修士課程224名、博士課程13名でした。最終合格発表者は表の通りです。

修士課程最終合格者数		博士課程最終合格者数	
社会情報学コース	19		
文化・人間情報学コース	19		
先端表現情報学コース	30	先端表現情報学コース	3
総合分析情報学コース	17	総合分析情報学コース	2
生物統計情報学コース	10		
合計	95	合計	5



BOOK&DVD



トコトンやさしいVRの本
(今日からモノ知りシリーズ)

廣瀬通孝 監修 東京大学バーチャルリアリティ教育研究センター 編
発行年月:2019年3月
出版社:日刊工業新聞社

本書は、VR教育研究センター開所1周年を記念して、センターのメンバーがVRの基礎的な技術について説明した本です。中学生にも読める啓蒙的書籍とはいももの、学問的に見ても結構深い内容が書かれていて、いろいろな書評を見ても好評のようです。小生のかかわった書籍の中では珍しく重版が上がり、うれしい限りです。(教授:廣瀬通孝)



フィリピン周辺地域の音楽
(みんなく映像民族誌第33集)

米野みちよ・寺田吉孝 監修
発行年月:2019年3月
発行元:国立民族学博物館

フィリピン南部ミンダナオ島のイスラームの人たちのゴング音楽(クリンタン)と、北部山地のカリンガ州の人たちのゴング音楽(ガンサ)を中心に、彼らの音楽と踊りについて、生活の現実と儀礼の実際との絡みで紹介しています。老人の即興名人芸が次の世代に伝わらないもどかしさと、伝統が生きているからこそ、形を変えて伝わっていく希望を伝えます。(准教授:米野みちよ)



ふくしま原子力災害からの複線型復興
一人ひとりの生活再建と「尊厳」の回復に向けて

丹羽史紀・清水晶紀 編著
発行年月:2019年6月
出版社:ミネルヴァ書房

総合防災情報研究センター客員教員・客員研究員の丹波史紀准教授と清水晶紀准教授らによる著書。東日本大震災から8年が経過し、多様な変化を遂げる被災地と被災者の現状を正しく把握することを目的とし、今後の地域再生に向けた課題を明らかにする。福島県の被災者に関わる第一線の研究者による、復旧・復興のあり方を考える研究書。(博士課程:安本真也)



アフター・カルチュラル・スタディーズ

吉見俊哉 著
発行年月:2019年7月
出版社:青土社

英語の「after」には、時間的に「の後で」と空間的に「を追いかけて」と二重の意味がある。この二重性を含意してタイトルを付けた。歴史は1970年代末、レーガンとサッチャーの時代に変わり始め、トランプ時代に至る。本書は新自由主義が跋扈するこの「ポスト現代」に、批判的文化研究は誰によって、いかにして可能なかを追いかけていく。(教授:吉見俊哉)



デフレーミング戦略
アフター・プラットフォーム時代のデジタル経済の原則

高木聡一郎 著
発行年月:2019年7月
出版社:翔泳社

近年、「デジタル・トランスフォーメーション」という言葉が注目を集めていますが、その原則を示したものは多くありません。本書では経済学の理論に基づきながら、世界各地で生み出されているイノベーションを分析し、その本質を「分解と組み換え」、「個別最適化」、「個人化」の3つの要素から構成される「デフレーミング」というキーワードでまとめています。(准教授:高木聡一郎)

国際連携

グローバル化のなかで情報学環は、日常の研究・教育活動の国際化を推進しています。最先端の情報学研究における「知の運動体」をめざし、世界の研究者とネットワークを構築するとともに、多様性を尊び、社会に貢献できる人材の育成に携わっています。英語のみで学位が取得できるアジア情報社会コース(ITASIA)では、世界中からの学生が学んでいます。

主要国際学術交流協定締結先

- (アジア) ●台湾: 国立政治大学伝播学院
- (中東) ●トルコ: ボスフォラス大学土木都市工学部

社会連携

情報学環では、社会に開かれた大学院を目指して多様な社会連携事業に取り組んでいます。外部有識者を顧問に迎えて「情報学環顧問会議」を設置し、社会の意見を問いつながりながら組織運営を行っています。また、新しい情報知の創造を中核コンセプトに、哲学から工学、芸術から政治経済、コンピュータサイエンスからジャーナリズムまで、社会と有機的

現在の社会連携

1. ヒューマンオーグメンテーション学 / ソニー寄付講座 (2017.4~2020.3)

ソニー株式会社からの寄付を受け、人間の能力を拡張する情報技術の研究教育を推進する講座です。人間とテクノロジー・AIが一体化し、時間や空間の制約を超えて相互に能力を強化しあうIoA (Internet of Abilities) 未来社会基盤の構築に向け、ヒューマンオーグメンテーション (Human Augmentation) 学に関する研究開発を中心に、学生向けワークショップやサマースクール、一般向けシンポジウムなどを企画・運営しています。



2. DNP学術電子コンテンツ研究寄付講座 (2015.11~2021.10)

大日本印刷からの寄付に基づき、これまで情報学環でめられてきたデジタル・アーカイブやe-learningに関する諸々の知見を踏まえ、学術的な電子コンテンツの教育・学習活用について実践的な研究開発を行っています。これらの活動と並行して、将来的なナショナル・デジタル・アーカイブ構想も見据え、日本の学術系デジタル・アーカイブ構築に向けての連携的役割を果たせるよう努めています。



3. セキュア情報化社会研究寄付講座 (2015.4~2020.3)

株式会社ディー・ディー・エス代表取締役社長の三吉野健滋氏から寄付を受け、サイバー空間における課題について、巨視的長期的視点から学際的研究、人材育成、政策提言を推進する講座です。「情報革命」が進行している中、サイバー空間における情報セキュリティおよび、その学際領域の研究、生体情報によるID管理や本人認証技術に関する研究を中心に、高度セキュリティ専門家・実務者の教育・養成も行っています。



さらに、台湾国立政治大学をはじめ、パートナーシップを結んでいる諸大学と定期的にシンポジウムなどを開催し、サマースクールも企画しています。また、国際的研究発信のためにWriting Support Deskを常設し、外国語で論文を書く学生や研究者への支援も行っていきます。

- (ヨーロッパ) ●英国: ロンドン大学ゴールドスミスカレッジ社会学部
- ドイツ: デュースブルク・エッセン大学東アジア研究所・社会学部
- イタリア: トレント大学

に連携しながら、多分野を横断する研究教育活動を展開しています。現代社会がアクチュアルに直面している問題を解決するために、競争的政府予算に基づく大型の研究教育プロジェクトのほか、以下のような講座を設置し、積極的に民間・社会との共同研究に取り込んでいます。

4. 総合癌研究国際戦略推進寄付講座 (2015.4~2021.3)

武田薬品工業株式会社、日本化薬株式会社、株式会社ヤクルト、小野薬品工業株式会社、日本ビーシーエー製造株式会社からの寄付に基づき、アジアにおける癌研究の情報基盤形成を目指す学際研究を進めています。Universal Health Coverage (UHC) の日本とアジアのモデルケースの国際発信を中心に、薬剤開発のための研究ネットワーク構築、アジア域内大学連携による文理融合型研究基盤の創設、グローバル人材の育成を行っています。



5. 情報技術によるインフラ高度化・社会連携講座 (2014.4~2019.3)

東京大学大学院情報学環をはじめ、首都高速道路株式会社、東京地下鉄株式会社、東京電力株式会社、東日本高速道路株式会社、東日本旅客鉄道株式会社、株式会社日立製作所、日本電信電話株式会社が共同研究機関となり、ICTによる施設マネジメントの高度化、情報活用による技術支援・技術伝承の仕組みの確立を中心に、インフラ・イノベーションの実現を目指し、産学官が連携して実践的な研究に取り組んでいます。



6. 情報経済AIソリューション寄付講座 (2019.4~2024.3)

今日の情報化社会では、GAFや中国企業を筆頭に、国際的に「AIソリューション」と呼ばれるシステムが生産性の向上を伴う高い経済効果を及ぼしています。本寄付講座では、毎年公開講座を実施し、各学生に対して経済経営・技術の両面から文理融合型の教育を実施しています。また、情報経済的観点から、AIの定量分析の基礎研究を実施します。これらの活動を、AIソリューションについて工学分野・産業分野の両面から広範な知見を有する専門家と実施しています。



学際情報学環の在学者数(2019年現在)

修士: 250人	博士: 149人
----------	----------

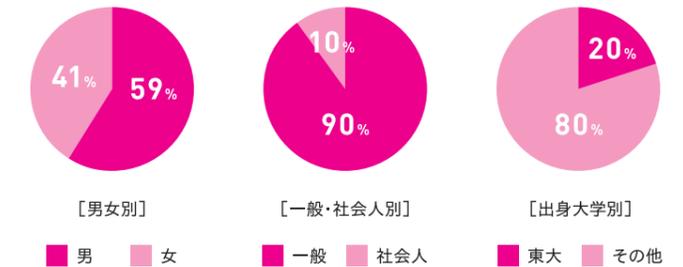
2019年度入試情報(募集人員、出願者数、合格者数、入学者数)

[修士課程](志願倍率: 3.7倍)

コース名	募集人員	出願者数	合格者数	入学者数
社会情報学コース	17人	41人	18人	16人
文化・人間情報学コース	22人	108人	23人	23人
先端表現情報学コース	21人	63人	25人	24人
総合分析情報学コース	18人	82人	20人	18人
		11人※1	2人※1	2人※1
生物統計情報学コース	10人	25人	11人	8人
アジア情報社会コース	12人	40人	18人	13人※2
合計(5コース)	100人	370人	117人	104人

※1 2018年9月入学 ※2 2019年9月入学

修士合格者内訳2019年度

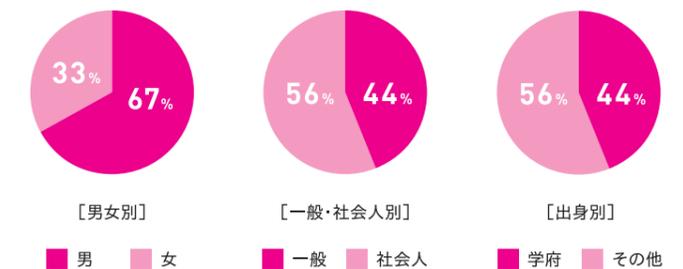


[博士課程](志願倍率: 1.52倍) 生物統計情報学コースは博士課程募集無し

コース名	募集人員	出願者数	合格者数	入学者数
社会情報学コース	9人	13(8)人	7(4)人	7(4)人
文化・人間情報学コース	11人	22(9)人	8(5)人	8(5)人
先端表現情報学コース	8人	7(1)人	5(1)人	5(1)人
総合分析情報学コース	8人	5(2)人	3(1)人	3(1)人
		8(3)人※1	5(2)人※1	4(2)人※1
アジア情報社会コース	8人	12(2)人	4(2)人	3人※2
合計(5コース)	44人	67(25)人	32(15)人	30(13)人

()内は内部進学者の数 ※1 2018年9月入学 ※2 2019年9月入学

博士合格者内訳2019年度



2018年度修了者就職情報

[2018年度修士課程修了者進路]

博士課程進学	16名
・学際情報学環	12名
・学内他研究科	3名
・他大学	1名
就職	61名
その他	16名
合計	93名

[2018年度修士課程修了者就職先一覧]

Meleap, Indeed.com, BOXJIC, Septeni Holdings, 日本放送協会、総務省、中央経済社、Chery Jaguar Land Rover Automotive, PwCコンサルティング、日本マーケティング研究所 リサーチャーコンサルタント、コパイロット、ナレッジマネジメント、ソニー、インタラクティブエンタテインメント、博報堂DYデジタル、ネオテクノロジー、グリー、デロイトトーマツコンサルティング、NTTコミュニケーションズ、マイナビ、ニトリ、beBit、ロバートウォルターズジャパン、メルカリ、ヤフー、カルビー、文部科学省、レイヤーズコンサルティング、Nature Architects、岡本健デザイン事務所、日立製作所、LITALICO、テレビ朝日、パナソニック、DeNA、スローガン、日産自動車、NTTデータ、日本政策投資銀行、野村総合研究所、楽天、国立国会図書館、Innoqua、シナスタジア、Amazon Web Services、三菱電機、LINE、面白法人カヤック、Xiaomi Corporation、IBM Japan、MIZUHO Financial Groupなど

特別奨学金プログラム

学際情報学環には、特別奨学金プログラムがあります。博士課程教育リーディングプログラムは、グローバル社会で活躍する博士を養成するため、修士課程から博士後期課程までの一貫した教育を行うものです。学際情報学環は、東京大学内に9つあるリーディングプログラムのうち、以下の3つのプログラムと連携しています。詳しくは、学環学環ホームページ(教育>特別奨学金プログラム)をご覧ください。

- ソーシャルICT グローバル・クリエイティブリーダー育成プログラム(The Graduate Program for Social ICT Global Creative Leaders, GCL)
- 社会構想マネジメントを先導するグローバルリーダー養成プログラム(The Global Leader Program for Social Design and Management, GSDM)
- 多文化共生・統合人間学プログラム(The Integrated Human Sciences Program for Cultural Diversity, IHS)

2018年度修士論文題目

1.社会情報学コース

- 情報に対する意識とメディア接触の変化に関する実証分析
- 「強くない」障害者が経験する日常と障害者
- 水害発生が予想される時の情報検索行動
- 日本における東洋学と「イスラーム世界」概念
- 台頭する「ヘイト本」と日本型出版の構造
 - ―市場・流通・制度の変化から
- 公共放送NHKのグローバルイズムへの対応
 - ―TV国際放送の先駆CNN構想のめざしたもの
- 戦時期日本における新聞メディアの方針転換
 - ―大阪朝日新聞の満州事変報道を事例として
- 感情分析から見える韓国の反日ナショナリズムの変容
 - ―平昌五輪・日韓戦のポータルサイト・コメント欄のオピニオン・マイニングによる一考察
- 留学生のSNS利用と異文化コミュニケーション能力との相関性について
- 国際的な人的交流と経済取引に関する分析
- メディア利用が環境問題に対する関心にもたらす影響について
 - ―日中大学生の比較を通して
- デジタルコンテンツのサブスクリプションビジネスが有する報償制度的特徴の考察
- 現代情報環境下における技術普及モデルの利用可能性と拡張可能性に関する研究
- シカゴ美術研究所印象主義絵画展のキュレーション
 - ―機械学習による分類と社会科学の視座からの考察
- 動画サイトの疑似同期コメント機能によるスキーマの活性化研究
- 特許から見る日本の情報通信関連企業の研究開発活動と企業価値に関する実証研究
- 現代日本におけるネットゲームユーザー分析
 - ―依存と脱却に着目して
- 日本における価値共創型企業に関する考察
- オンライン・オピニオンリーダーの発信が消費者の購買行動に与える影響
 - ―中国の網紅Eコマースを例に

2.文化・人間情報学コース

- MIDI規格の社会史
- 難民とメディア
 - ―2011年以降のバレスチナ難民報道における〈メディア化〉と現実
- プライバシーポリシーの歴史の変遷
 - ―生活者と事業者のコミュニケーションに関するメディア論
- 自己評価と他者評価の調整過程に関する探索的研究
- 知識媒介手法を使って創造的風土を活性化する
 - ―研究開発現場への適用事例の分析
- 文字式におけるプロセプト的思考の獲得を支援するゲーム教材の開発と評価
 - ―数学苦手者を対象として
- アイロニーから異化へ
 - ―ダグラス・サーク映画の「筋立て」について
- 地域鉄道のアトラクション・メディア化
 - ―地方と鉄道の衰退局面で現れる想像力
- 日本における生命保険と発症前遺伝学的検査をめぐる諸課題の検討
- 「留学ブーム」から見る中国家庭の進路選択のメカニズム
- マインドフルネスが生理、認知に及ぼす影響の研究
- Twitterにおける炎上の相互作用プロセス
 - ―インターネット上の社会的反作用の形成
- 「錦絵新聞」の性格と意義の考察
 - ―「西南戦争錦絵新聞」を例に
- 中国の瀋陽市における朝鮮族エスニシティの変容に関する研究
- Nostalgia for the Future: Imaginations of Kowloon Walled City in Japan from 1980s to 2010s
- 大学の「エクセレンス」概念の展開に関する歴史的研究
- 学生街の喫茶店
 - ―神保町・下北沢のジャズ喫茶に関する社会学的考察

- 中学生を対象とした正課外活動における社会情動的スキルの向上に関する評価
 - ―UWC ISAK Japanのサマースクールを対象として
- Toward an Understanding of the 'Information Gap' Faced by Non-Japanese-Speakers in Crisis Scenarios: Based on Tweets from the 2016 Kumamoto Earthquakes
- Engaging Museum Visitors in Deep Inquiry into Geovisualization through Semi-Structured Facilitation
- テレビ番組による出演者のエンパワーメント
 - ―NNNドキュメント「汚名」を事例に
- 乳児における身体動作系列の統計的学習に音系列が及ぼす影響
 - ―事象関連電位からの検討
- 映画配給のメディア論
 - ―産業的制度化とその変容
- メディア・リテラシーの学校における持続的発展に向けて
 - ―教師のライフストーリーからの考察
- 日越間オフショア開発の現状とその人材に関する研究
 - ―ベトナム人ブリッジSEに着目して

3.先端表現情報学コース

- Additive Manufacturingにより実現される螺旋面を用いた柔軟構造に関する研究
- Additive Manufacturingを用いた日常用義足の開発に関する研究
- 鉄道システムにおける異常状態検出に関する研究
- 深層学習技術を用いた自閉症児童の行動・機能分析に関する研究
- 対称レンズ構造を用いた再帰透過式空中像の表示領域拡大
- AiR Marker
 - ―触覚フィードバックを与える不可視ARマーカ
- Brittle Fracture Shape Generation Using Deep Learning
- グループワークにおける付箋配置に基づく実時間カテゴリ認識
- Haptic Turntable
 - ―回転運動とリターゲティングを用いた力触覚フィードバックシステム
- 交差点付近に設置した定点カメラの画像情報を用いた自動運転システムに関する研究
- 予測医療に向けたバーチャル手術のためのインターフェースの開発
- 等身大ヒューマノイドにおける人に安全で安心感を与える柔軟外装と動作実現に関する研究
- 一人称視点映像における動きとアピランス特徴を用いた適応的な行動候補検出
- ロール方向の回転量操作を用いたリダイレクテッドウォーキング
- 聴衆反応の単一アバタへの集約による話者支援に関する研究

4.総合分析情報学コース

- DDoS/Botnetに焦点を当てたダークウェブマーケットの統計的分析
- リカレントニューラルネットワークとアテンションを用いた強化学習
- 強化学習を応用した人狼ゲームエージェント
- Smart Building
 - ―アプリケーションの移植性・開発効率向上のための空間指向プログラミングモデル
- 工場間連携のためのデータ変換機構
- 深層学習を用いた周辺視野映像生成による映像視聴体験向上に関する研究
- Smart Buildingにおける、Location-Proof機構を利用したアクセス制御の実現
- 深層学習によるスペクトログラム解析を用いた管楽器練習補助の研究
- 移動機構を備えた球体ディスプレイを用いる遠隔コミュニケーションに関する研究
- 災害時利用を想定したPersonal Data Store基盤の電子母子手帳の開発
- 透過性を制御可能な装着型スクリーンによるインタラクションの研究
- 再帰透過光学系を用いた物体の外形状作成手法の提案
- ブロックチェーン技術を用いたIoTデバイスの機能流通プラットフォーム
- Traffic Analysis for Anomaly Detection Using Hierarchical Heavy Hitter and Convolutional Neural Networks
- Prediction of Protein-Nucleotide Binding Site Using Machine Learning Method
- Evaluation of LoRa Radio Propagation and LoRa Base Station Placement Algorithm in Urban Regions

2018年度博士論文題目

- Deep Multi-Domain Multi-Task Learning of Evaluation Functions for Chess-Like Games
- 行動促進のためのインタラクティブシステムの構成手法に関する研究
- 役員秘書の職場における経験学習に関する研究
- ドライバが意のままと感じる車両操舵応答特性に関する研究
- 自律的学校経営を促すリーダーシップに関する研究
- Exploring Benefits of Deep Dataplane Programmability Through In-Network Processing Use Cases
- Disassembling the Empire, Assembling the Nation-State: Imagining Locality, Nation, and State among Chinese Students in Japan, 1896–1911
- 滑りと衝撃を伴う動的全身動作を実現するヒューマノイドの身体構造と制御機構の構成法
- テレビ都市・東京
 - ―戦後首都の遠視法
- Providing an Experimental Platform for Interfaces that Apply Electricity to the Human Body
- 「ひらがな」認知に及ぼす「マス」の影響
- Using Social Media Communication Data for Recovery: A Study Exploring the Possibility of Detecting Socio-Economic Activities Following a Disaster
- ワーク・ライフ・バランスの課題と実践に関する研究
 - ―個人と組織を中心に
- Search and Communication Based on Affective Understanding of Fonts and Images
- 一方向型サイエンスコミュニケーションの意義と可能性

情報学環所属

アジアにおける宗教リーダーとガバナンス 池亀 彩 准教授
 専門家と非専門家とのコミュニケーション 石崎雅人 教授
 作曲・指揮研究室 伊東 乾 准教授
 生物統計学 上村鋼平 特任講師
 アジアの法・歴史・社会 Khohchahar E. Chululu 准教授
 生体シミュレーション・科学技術コミュニケーション 大島まり 教授
 生物統計学の研究と実践 大庭幸治 准教授
 統計学 小川光紀 特任講師
 言語と記号の相貌 影浦 映 教授
 マテリアル・エクスペリエンス・デザイン 笥 康明 准教授
 ゲームプログラミングと人工知能 金子知適 准教授
 知能情報処理 上條俊介 准教授
 メディアの社会学 北田暁大 教授
 「巧みさ」の身体運動科学 工藤和俊 准教授
 IoT(Internet of Things)/Ubiquitous Computing 越塚 登 教授
 メディアと知的財産権 酒井麻千子 准教授
 科学技術と社会の関係を考える 佐倉 統 教授
 都市・空間情報解析 貞広幸雄 教授
 薬の安心・安全を確保する医薬品情報学 佐藤宏樹 准教授
 ジェンダー論・メディア表象学 Jason G. Karlin 准教授
 異端の学問で異端の文化を考える 菅 豊 教授
 災害社会科学 関谷直也 准教授
 デジタル経済論 高木聡一郎 准教授
 ネットワーク経済・社会の研究 田中秀幸 教授
 分子シミュレーション 寺田 透 准教授
 空間指向メディア技術 苗村 健 教授
 新しい情報通信基盤の創成 中尾彰宏 教授
 メディア研究、ジャーナリズム研究 丹羽美之 准教授
 防災システムのデザイン 沼田宗純 准教授
 マスメディア/ジャーナリズムを学問する 林 香里 教授
 コンピュータと国際政治 原田至郎 准教授
 いのちと情報を権力論から問い直す 廣野喜幸 教授
 メディアの表現史、出版・報道の表現史 前島志保 准教授
 政治学・世論研究 前田幸男 教授
 Media Studies 水越 伸 教授
 理論社会学 三谷武司 准教授
 将来の地震の揺れの予測 三宅弘恵 准教授
 都市防災マネージメント 目黒公郎 教授
 カルチュラル・スタディーズ 矢口祐人 教授
 学習環境のイノベーション 山内祐平 教授
 高速ロボットの開発とその応用 山川雄司 講師
 情報法・政策 山口いつ子 教授
 デザイン・エンジニアリング 山中俊治 教授
 実世界指向インタフェース 暦本純一 教授
 記憶の解凍 渡邊英徳 教授

研究科・研究所等所属

映像・メディア情報処理 相澤清晴 教授
 都市空間情報解析 浅見泰司 教授
 行動体情報学 稲葉雅幸 教授
 身体情報学 稲見昌彦 教授
 人と社会と人工物の知能を科学する 植田一博 教授
 時空間メディア工学 大石岳史 准教授
 交通制御工学 大口 敬 教授
 創造的認知プロセスの解明 岡田 猛 教授
 ヒューマンインタフェースとインタラクションデザイン 小川剛史 准教授
 リアルタイム/インタラクティブCG 金井 崇 准教授
 教育用インターフェース開発と実践 川越至桜 准教授
 歴史社会情報論 菊地大樹 准教授
 身体性に基づく認知の創発と発達 國吉康夫 教授
 薬剤疫学と診療情報解析 小出大介 特任教授
 コンピュータビジョン 佐藤洋一 教授
 東アジアにおける安全保障秩序 佐橋 亮 准教授
 生物情報科学 清水謙多郎 教授
 近代日本史、宗教と世俗性、空間(化) 鍾 以江 准教授
 車両の運動と制御 須田義大 教授
 「動くアジア」の比較社会学 園田茂人 教授
 空から森林を見ています 露木 聡 教授
 地震情報を地震防災に役立てる 鶴岡 弘 准教授
 モビリティにおける計測と制御 中野公彦 教授
 パーチャルリアリティと人間拡張 鳴海拓志 講師
 がん臨床試験のデザインと解析 平川晃弘 特任准教授
 認知情報分析学 開 一夫 教授
 ゲーム学習方法論と学習支援技術 藤本 徹 講師
 Design Led Innovation Miles Pennington 教授
 Political Institutions Kenneth Mori McElwain 准教授
 東アジアの政治と国際関係 松田康博 教授
 生物統計学・理論疫学 松山 裕 教授
 朝鮮地域研究と歴史認識 真鍋祐子 教授
 社会調査と計量社会学 三輪 哲 教授
 先端医療のELSI研究(Ethical, legal and social implications Research) 武藤香織 教授
 みまもり工学 森 武俊 特任教授
 知的インタラクティブシステム 矢谷浩司 准教授
 視覚メディア 山口 泰 教授
 現代科学論・科学の公共政策分野 横山広美 教授
 音楽学と移民研究の交差点 米野みちよ 准教授

あとがき

今号より、ニューズレターの「あとがき」を担当することになりました。学環学府は、さまざまな分野の「研究たち」が自由に生きるジャングルです。例えば、巻頭インタビューに登場する菅先生の研究テーマは「闘牛と錦鯉」。トピックスでは「人間拡張」学が紹介されています。ニュース欄にも、多彩な研究が華を咲かせています。このように、これまでは共存し得なかったものたちが、生態系をつくる。そして、あり得ない結びつきが生まれ、起こり得ないことが起きていく。そうした空間をつつていきたいです。(渡邊英徳)

GAKKAN 53 2019.10
 東京大学大学院 情報学環・学際情報学府
 Interfaculty Initiative in Information Studies
 and Graduate School of Interdisciplinary Information Studies
 〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1 mail: news@iii.u-tokyo.ac.jp

編集委員:安ウンビョル、糸永順子、鈴木麻記、鳥海希世子、丹羽美之、潘 夢斐、
 デイビッド・ビュースト、福岡政期、渡邊英徳
 デザイン:MARUYAMA DESIGN 丸山智也

<http://www.iii.u-tokyo.ac.jp>